
Fate/Bizarre night ~ DIOの世界 ~

?-さるの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / B i z a r r e n i g h t ｝ D I O の 世界 ｝

【Nコード】

N 4 1 3 0 0

【作者名】

? - さるの

【あらすじ】

本来ならば“正義の味方”が仲間とともに未来を掴む英雄譚。しかしそこに、一つの“黒”が混ざったら…。その“黒”が余りにも強大であったのなら……。

これはそんな“IF”、奇妙な夜の物語。

（前書き）

加筆修正しました。

― その男が現れた事が全てのはじまりで……

「問うぞ……」

― そして全ての終わりだった……

「貴様が……この『DIO』のマスターか……？」

― その男はあまりに大きく……

「ふむ、マスター。つまりはこういう事かね。
君はこの戦い（聖杯戦争）に参加はしない…、聖杯に望む願い（もの）は何もないと……そう言うのだね？」

— あまりに美しく……

「人は誰しも願いを持つ。それがどんな絵空事であろうと願いは願い。それすら無いなど屍人も同然……」

今一度、問おうマスター。君は何一つ、願いを持たないと言うのかな？」

「……そうだ、それでいい。どんな些細であろうとも、願いあるからこそ生命は『成長』し『進化』を遂げ、『限界』を、そして『運命』を突破していく……」

今まさに君は、一つの『限界』を超え『成長』したのだ。」

―― あまりに甘く……

「そこでだマスター、私と『友達』にならないか……？ 私と共に
さらなる高みへ至り、共に願いを叶えよう。

君に『永遠の安心感』を……あげようじゃないか……。」

―― そしてあまりにも、邪悪だった……。

「それでいい。これで友達だよ……マスター。
改めてよろしく……。『桜』」

ガァーン！

「おつとお！　へっ、ラッシュで俺に付いてくるライダーとはな。予想以上だ。」

「……素晴らしい速さだが、なぜ本気を出さないランサー。このDIOを侮辱するつもりか？」

「へえ……、さすがに見抜くか。
ま、悪いがよ、クソツタレのマスターに本気を出すなって言われてんのさ。で、この様ってワケだ。」

「騎士道……いや“令呪”とかいう奴か……。
フン、ランサーよ。興が削がれた、全力を出せるようになったのなら来るがいい。相手をしてやる。」

「はっ！　そうかよ、まあそれもアリだな。そっちのほうを楽しめそうだ。」

「なら今回は退かせてもらうがよお、そこまで言うなら、テメエも『全力を出せるように』しておきなッ！」

「フン、見抜かれていたか……。そうだ、まだ足りない。足りんのだ。一刻も早く取り戻さねば、我が『真の力』を……ッ！」

― その男と言う一つの異物が……

「ヒッ……………ウヴッ」

「間桐慎士くん、そんなゲロを吐くほど怯えなくてもいいじゃないか。私は桜の友達だ、君も『友達』になろう……………」

さあ言うがいい、“お前の欲しいものはなんだ？”」

「ひ、ひいいい!？」

ズギュル!

「ヒヤハははハハハはああああ!！」

ガン!

「くっ！？」

「セイバー！」

「エエミいやあ、トオオさカアあ！ 僕は、僕はついに手に入れたぞッ！ 人を、魔術を超えた『この力』をッ！ D I O様からッ！」

「くそ、慎士い……！ 遠坂なんとかならないのか！？」

「……ああなつてはもう駄目ね。『アレ』はもう人間じゃあなく死徒（吸血鬼）！ 殺すしか手は……ないッ！！」

―― 聖杯戦争を捻曲げる

「■■■■■■■■■■――！！」

「ムウウッ！」

「あ……」

ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

「これが『世界』だ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。なにも“あのデクを相手取る”必要などなかったということだ。尤も、貴様は“死んだこと”すら気付いてはいないだろうがな。」

どさっ

「だが感謝しよう、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ。貴様に追い詰められた事で、このDIOはかつての“力の片鱗”を取り戻せたのだからな。」

……だがいまだ『二秒』ほど、一刻も早く更なる力を戻さねばな……」

――その悪を前に立ちふさがる“正義の味方”

「あんたが、DIOッ！」

「デメエが……！　デメエが慎士とイリヤを！」

「ライダー、騎士として貴公の所行は到底見過ごせるモノではない。今此処で、斬るッ！」

「フン、消えろセイバー。貴様はバーサーカーはおろかランサーにも及ばん。力を取り戻したこのDIOの前に立つ資格もない。」

「てめえ、一体何を言っ……？」

「あんた、まさか！　一体どれほどの民間人を巻き込んだの……！
？　どれだけの人の血を吸ったのよッ！？」

「ふ……、フッフ、フハハハハハハハハハハハハハハハハッ！
！！」

「な、何が可笑しいのよ！」

「フッフ、かつて我が立ちふさがった男が吐いた戯れ言^{ことば}を、まさかまた聞くとは思っていなかったぞッ！

その波紋の男もこう言った、『どれほどの血を吸ったのか』……と。

それに対し、このDIOはこう答えたのだ……！

『貴様は今までに食べたパンの数を憶えているのか?』となッ!」

「なっ!?!」

「……こいつは英霊なんかじゃない、最低の外道だわ!

冬木の管理者として、こいつは! 今ここでッ! “確実に殺さなければ”ならないッ!」

「DIOオォー!」

「貧弱、貧弱ウ!」

バゴオ!

「ぐっつ、このパワーはッ……!?!」

「せ、セイバー!?!」

「じよ、冗談でしょう!?! 接近戦で、ライダーがセイバーを圧倒するなんて……!」

「やはりその程度か。貴様等はこのDIOにとって、^{モンキー}猿にすぎんッ! 大人しく我が力の贄となれい!」

「これが私の“^{せかい}固有結界”。『^{アンリミテッド・ブレイドワークス}無限の剣製』、^{モンスター}此処には貴様を殺す

手段は幾らでも在るぞ、ライダー。」

「ほごくなアーチャー、このDIOを見下す事は許さん。このDIOを殺すだど？」

思ひ上がるな、貴様に出来る事は、むやみやたらに剣を浮かべ、セイバー達を逃がす為の足留めをする事だけよ。」

「やれやれ……。自らを“絶対強者”と思ひ込むほど愚かな事はな
いと思ひうのだがね。

まあいい、そこまで言ひなら受けてみるがいい、ライダー……！
我が“固有結界”。半径200メートルの『アンリミテッド・ブ
レイドワークス』をーッ……！」

「フン、知るがいいアーチャー！
我が“真の力”は、まさに！『世界』を支配するものだといひ
ことをッ！」

――そして現れる――第8のサーヴァント《もう一人のイレギュラー》

ゲート・オブ・バビロン
「“王の財宝”」

「ええいッ！ アジな真似をッ！」

ドンドンドンドン！

「貴様がライダーか。セイバーを下したというから出向いてみれば……興醒めだ。

何のことはない。ただの雑種であつたか。我が^{おれ}直々に手打ちにしてやろう。」

「フン、このDIOを雑種と罵るか。まあいい、我が目的は既に果たしている。

今日のところは退いてやろう“人間”の王。首を洗って待つているといい……。」

「我を愚弄するなよ雑種風情が。

我は“英雄王”、『世界』の王よッ！ 世界などとうに背負っている。“人間”など小さな括りで終わる凡王と並べるな！」

「フハハハ、『世界の王』か。その言葉、いずれ後悔させてやろう。さらばだ、英雄王よ。」

――そして運命は大聖杯へ

「ふん」

こんな程度の力が“王”の力だと……？

正直、見下げ果てたぞ。これならば、まだアーチャーのほうが芸があつたわ」

「なんだと……？」

「まあそんな事はどうでもいい。ときに貴様は言つたな英雄王。自らが“世界を背負う王”であると。

好都合よッ、今ここで貴様に教えてやろう！

このDIOにとって“世界”とは！

“支配”するものよッ！

このDIOを“進化”させ、『天国』へと至らせるためだけの踏み台！

ただそれだけのものだッ！！

故に今から！ 貴様を蹂躪しッ！ 貴様の総てを超越してやるッ

！！

スタンドのパワーを全開だ！

英雄王よ！ 遊びのサービスタ임は終了だ！ 敬意を表し我が『力』のすべてをもって、決着をつけるッ！！」

「ふん、よくぞそこまで吠えたな雑種！
ならば受けるがいい。」

我が宝具、“世界を切り裂く”王の一撃を——ッ！」

—そして……

おおおおおおおお——

「これが聖杯……。なんと凶々しくも美しい姿よ——

……これで我等が望みがかなう、そういう事だな——桜。」

「はい、あと少しですべてが終わりです。もう少しで先輩を手に入
れられる。……私は理想をかなえられるんですよ——『DIO様』。

」

「フッフ、その通りだ桜よ。さあ……時間だ。貴様は貴様の因縁に
終止符をうて。自らの手でな……。」

「はい、D I O 様も、お気を付けて。」

ジャリ……

「先輩、姉さん……。お久しぶりですね……。お元気そうで何よりです……クスクス」

「……桜」

「……そうね、少し考えれば分かる事だったわ。桜、つまりはこういう事でしょ？」

“ライダーのマスターは、桜だった”

「はい、そうです。私がD I O 様のマスターです。驚きましたか？」

「D I O 様……ね。やってくれるわ……！」

「応えてくれ桜。これが……こんなものがお前の望んだ事なのか？」

「はい、そうです。私は弱かった、ただ嘆き、救いの手を待つ事しかできなかった。ほんの些細な願いも叶えられなかった。そんな私を救って下さったのがD I O 様だったんです。

もう少して願いが叶うんです。だから邪魔をしないで下さい。

姉さん、私に先輩を下さい。そうすれば助けてあげます。一緒に

新しい世界を生きましょう?」

「愚問ね、桜……。答えは『NO』よッ!

この世界も! 衛宮くんもッ! 何一つ、今のあんたには渡さないッ!!

管理者でもマスターとしてもない、一人の人間として、あんた
たちを止めてみせる!

新世界……? 笑わせるんじゃないわよッ!」

「そうですか、残念です……。

なら……、死ぬしかありませんねッ、姉さんッ!」

―― 物語は最終ラウンド
最終局面に……

ザッ!

「ふん、来たかセイバーよ。どうやら貴様も本来の力を取り戻した
ようだ……。挑むつもりか、このDIOに対して……」

「然り。ライダー、今や私には聖杯で叶えるべき望みはない。だが

それでも、貴公をこの戦いの勝者とするわけにはいかない。それが、私の『騎士としての誓い』だ」

「そうだ、その目だセイバー。貴様のその目が気に障る。

甘っちょろい正義感、愛だのなんだの安っぽいその思考。そして何より、“覚悟”を秘めたその瞳！ 我が運命の天敵を思わせるそのグリーンの瞳が……！

貴様だけは、ジョナサンを彷彿とさせる貴様だけは！ 一切の手加減もなく一気に殺す……！

「存在を許せぬのは私とて同じこと！ 私の“^{誇り}剣”のすべてを以って！ ライダー、貴公を討つ……！」

「よかるう、やってみる。最終ラウンドだ、セイバーッ！」

「……いくぞッ——！！」

「フンッ！ とるに足らん人間も、吸血鬼も、英雄も、この“世界”も、全てを支配してやるぞ！ 我が智と力の前にひれ伏すがいいぞッ！」

『ザ・ワールド
世界ッ！』

t o b e c o n t i n u e d : ?

○ライダー

ディオ・ブランドー

真名 : D I O

マスター : 間桐 桜

属性 : 混沌 / 悪

・能力

筋力 : B ↓ A +

耐久 : B + ↓ A

敏捷 : D

魔力 : E

運 : A ↓ C

宝具 : ? ↓ E X

・スキル

騎 乗 : E

∴ 運転させる事に特化している。個人への補正はほぼなし。

対魔力：E

… 全くカット出来ない。補正值ゼロ。

超再生：B

… 型月世界の吸血鬼「死徒」の持つ技能『復元呪咀』の亜種。陽の光、もしくはそれに準ずる力に当たらない限りはほぼ不死身である。サーヴァント化に伴い1ランクダウン。

悪のカリスマ：A+

… 技能『カリスマ』の亜種にして下位互換。属性・悪に対して強い効果を発揮する。また高ランク場合、ある程度は『カリスマ』と同じ効力を持つ。

肉の芽：A

… 植付けた相手に対して、強制的に『カリスマ：EX』と同等の効果を発揮する。魔術的效果はない。脳にまで達しているため、取り離すのはほぼ不可能。

・宝具

『ザ・ワールド』世界を支配する者：EX

… 圧倒的なパワーとスピードを誇るDIO自身の精神エネルギーのビジョン。開戦時には大した力を持つてはいなかったが、DIOが力を取り戻していくに伴い、その力を増していった。

バーサーカー戦にて取り戻した真の能力は『時間停止』。数秒間の間、DIOを除くあらゆる『世界』を制止させるというもので、魔術を超えた「魔法」と同義の超能力である。

こと接近戦において、この能力を封じる術を持たない以上、対抗できる可能性は0に等しい。

・解説

“ジョジョの奇妙な冒険”に登場する物語のキーキャラクター。今回登場したのは、3rdシーズンのDIOである。彼の生い立ちや原作での立ち位置、および“ジョジョ”本編についての詳細は割愛。

彼の戦闘スタイルは、典型的な近接パワー型。吸血鬼である自分自身のパワーとタフネスを頼りに、スタンド能力を組合せて戦う。彼自身のパワーも脅威的で人間を容易く壊し、スタンドパワーを全開にした時は数十トン軽くあるロードローラーやタンクローリーを抱えたまま上空に飛び上がる事すら可能。その他の描写や、同等のパワーを有するとされる『宿敵のスタンド』の活躍を顧みるに、純粋なパワーのみならばバーサーカーに匹敵ないし凌駕すると思われる。

スピードに特筆すべき点はないが、『世界』の能力によってカバーされているため欠点にはなっていない。

また攻撃のスピード、すなわちラッシュ力は無類無敵。凄まじいパワーを宿した拳の暴風となる。

このように接近戦の戦闘能力は反則的であるが、完全無欠ではない。

まず、攻撃手段が近接的なものしかないこと。そのため射程外からの攻撃には防戦にならざるを得ず、対好手段も乏しい（ナイフ投げくらい）。

そして強い神秘を内包した攻撃を持たないのも致命的である。それは超常の存在、つまり“死なない存在”に対して有効な攻撃手段がないということ。負けはしないが勝てもしない、という状況にもなりうる。

（後書き）

この作品は、突如謎の電波を拾ったので、何も考えず勢いで書き殴りました。やりたかっただけです。今のところ反省も後悔もしていません。

『DIOがDIOとして聖杯戦争に参加。しかも主人公補正持つて。』をテーマ（？）に書きました。DIO様らしさは出ていたでしょうか？

“Fate”を選んだ理由としては、パワーバランスの関係です。ジョジョのキャラを放り込むのに丁度いいのがコレくらいかと判断しました。

……DIO様の強キャラぶりが目立ちましたが、そこはアレです。ダイジェスト効果と主人公補正です、気にしたら負けという事で一つ。

“ネギま！”や“リリカル系”では明らかに力不足なので活躍の為に魔改造を施さなければいけないし、かといって“ゼロ魔”“恋姫”では確実に無双状態になると思いました。それだけは避けたかった私の苦肉の策でございます。

なにぶん初心者なもので至らぬ点も盛り沢山です。宜しければ感想やアドバイスなど頂けたらなあ、と思います。

それでは改めまして、『Fate/Bizarrenight』DIOの世界』を最後まで読んで頂いた読者様に、心よりお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4130o/>

Fate/Bizarre night ~ DIOの世界 ~

2010年12月29日23時44分発行